



月刊 千葉動力車

「破産は国鉄解体自問」 — 鉦場がJR総連解体総決起を —

JR東労組が九月に全専従者学習会を開催して、「モデル職場を各地本一ヶ所設定し、専従者の常駐体制をつくる」と決定した、一二月までの「国鉄解体月間」は、大破産のうちに終わろうとしている。

やったことといえば、当局の力をかりて、人事異動にからむ脱退工作や国労の拠点職場や宿舍に対するピラマキぐらいだ。

東京では、勤労課にもぐりこんだ革マルを手先とした、国労の活動家集団がいるベンディング職場つぶしも大失敗。高崎のある職場では、国鉄解体のための行動方針を職場集会で打ち出しても、組合員から猛反発をうけ否決される始末だ。

この方針に従ったのは革マル分子のみであり、彼らは職場で完全にういてしまい、旅行などの行事にも組合員の参加が極端に減るなどということがおきている。

「九六秋の陣」として大宣伝された、「国鉄解体のための取り組み」によって、国労を脱退しJR総連に加入した組合員はほとんどいなくなったばかりか、かえって国労組合員の怒りをかきたて、「JR総連絶対許さない」と、闘いを活性化させ、革マルと闘って組合員は元気になるという。

なんの成果もなかった「国鉄解体月間」。結論から言えば、この失敗により、ますます危機を深めた革マルは凶暴化し、なお一層、この運動にのめりこむ

ことは明らかだ。

これを断固として迎え撃ち、この好機をとらえて逃がさず、JR東当局とJR東労組・革マルの結託体制、一切の差別・選別の元凶であるJR体制、その最弱の環であるJR総連・革マル打倒に怒りも新たに総決起しよう！

結託体制が 延命の道

支配権力からの「お払い箱」のおびえ、当局との結託体制の維持を唯一の延命の道とするJR総連・革マルは、九六年前半期、デタラメな「時代認識」と「列車妨害」に生き残りをかけてきた。

「時代認識」とは、革マル特有の「労働者は闘っても勝てない」論、だから、戦争と大失業の時代に「ストライキよりは理性である」・・・「ワークシェアリングで賃金は半分でもいい」「失業対策に軍需生産を」と、要するに資本や当局に「もつと屈服します、先兵になります」・・・「だから捨てないで」ということ。

「列車妨害」とは、「会社（東日本）が亀井や葛西とつるんでわれわれを裏切れば山手線はガタガタになる」ということを忘れてもらっては困る」と、JR東経営陣を威嚇・牽制し、「東労組とJR東日本の経営陣を破壊するための謀略」「分割・民

営化反対を叫ぶものの「犯行」と、オウムばりの自作自演のデマをもって、あわよくば国労と動労千葉を破壊しようとしたことだ。（列妨は、革マルによって引き起こされていることは明らかで、革マル自ら墓穴を掘る結果となつてしまった）。

こうして、六月株主総会における、M・H・M体制といわれる、松田社長、花崎総務部長と松崎体制の確立によってひとまず結託体制を維持し、七月一日に「第三次労使共同宣言」を締結する。

この実践的結論が、「国鉄解体方針」だ。

国鉄勝利 革マル打倒

そして、今回の国労の「八・三〇申し入れ」に「まっぴりした」とばかりにとびつき国労攻撃を開始した。

しかし、最初に述べたとおりこれは大失敗する。

それもそのはずだ、一体どこの誰が、「国鉄解体」などという方針を支持するのか。

国労の「八・三〇申し入れ」

に対して、「国労は変質した」「自民党権力者、悪徳経営陣に身を売った国労」「国労の転向を許すな」「だから国労を解体する」と、いくらJR総連・革マルが叫んだところで、とうの昔に「転向」し、分割・民営化の先兵となり、国労や動労千葉

に対する、差別・選別、あらんかぎりの不当労働行為の限りをつくしているのは、JR総連・革マル、その人であることを、すべての闘う、心ある労働者はお見通しだ。

この間、何度も確認してきた

とをり、こうまでして「国鉄解体」と言わざるをえないところにJR総連・革マルの最大の危機がある。

一〇年たつても、国労、動労千葉をつぶせなかった！このことがJR総連・革マルを万力のごとく締めあげている。ここで断固として、革マルと対決し、JR総連解体・組織拡大を勝ちとれば、我々の大勝利だ。

JR総連の打倒は、正念場を向かえた国鉄決戦！JR体制の一方の柱を打ち倒すという戦略性において勝利をめざすそのものの闘いだ。

大切なことは、国労中央の「八・三〇申し入れ」「東日本包囲網」というような、政府・資本、「お上」にお願いする他力本願の方針ではなく、あくまでも現場労働者の力に依拠し、怒りを結集して、自ら闘い、情勢を切り開くことだ。

動労千葉がそうであったように、革マル・ファシスト労働運動と闘って、労働者は元気になる、明るくなる。国鉄労働運動は強くなって、甦る。

九七年、革マルとの闘いに決着をつけるべく、動労千葉が鉄労働者の最先頭で自信と確信をもってこの道を突き進もう